

# 日本語における会話能力のスタンダードの必要性

## －中級の問題を中心に－

栗飯原 美智

### 要 旨

日本語のスタンダードの必要性が叫ばれている現在、韓国の教育現場でもスタンダードの必要性を感じさせられる。特に中級レベルの学習者は会話能力に関して明確で具体的な目標や本人の位置づけを求めている。しかし、スタンダードが明確にされていないため、日本語会話能力の基準も曖昧であり、教師側も学生に明確な指導がしにくい。そこで、中級レベルの問題に注目しながら日本語会話能力のスタンダードの必要性について考察するとともに、現在日本や韓国で行われている会話試験について英語の会話試験（ACTFL・CEFR）とともにみる。

### 1. はじめに

スタンダードについて芝原 (2007) には「スタンダードは「標準・規範」であり、学習者が目指す言語運用能力とはどんなものか、そのための教室指導や学習環境はどうあるべきか、そのような言語運用能力をどう測るかについて記述された包括的な指針である。」とある。スタンダードは現在、日本語に関しても豪州・米国・カナダ・ヨーロッパなどでは、その地域で一貫性を持った一つの目安として作成されており<sup>(1)</sup>、日本語教育の中心となる可能性がある。韓国・中国では中等教育に関しては指導用要領があるが、一般の学習者対象のものは無い。韓国の学習者は、スタンダードの項目の中でも、学習目標や評価に関しては大いに関心があるところである。実際、韓国の日本語教育現場では、特に中級レベルの会話クラスの学習者から学習目標や評価についての関心を感じる事が多く、学習者から教師に常にそれらを分かりやすく示すことが求められている。スタンダード全体から考えると、評価については重要な部分であることが分かる。まず、評価する基準を具体的にすることで、それを目指した教室指導や学習環境が決まり、スタンダードが形作られると考えるからである。そこで、英語を中心にアメリカやヨーロッパのスタンダードの会話能力基準と現在の日本語の会話能力基準をみながら、日本語のスタンダードの必要性について考えてみる。

### 2. 問題点

スタンダードの必要性を感じさせられる大きな問題として、特に中級レベルをはじめとする各レベルの曖昧さが挙げられる。学習者の関心は、主に学習目標と評価である。しかし、中級レベルを例に挙げると、中級の教科書は他のレベルに比べ、特に教科書によって

難易度が様々であり、教育機関によっても同じ中級レベルで内容も難易度も様々である。そのため、学習者は教育機関が変わるたびに学習内容や目標変わるといようなことが起こっている。評価に関していえば、韓国でもかなり多くの学習者がJLPTを受験している。口頭試験や会話評価基準のない韓国では、学習者はJLPTに自己の評価を頼っているところが大きい。しかし、JLPTは会話能力の評価をすることは難しく、テストのレベル基準も誰を対象とした基準なのか曖昧である。JLPT以外の試験に関しても、各試験の基準に一貫性はなく、学習者の混乱のもととなっている。このような学習内容、評価に一貫性がないことは日本語のスタンダードといわれる基準がないことからくる問題であると考えられる。また、現在は日本語独自のスタンダードがないため、外国語のスタンダードに頼っていることから、日本語にふさわしい項目の欠如も仕方がないことだともいえる。

### 3. 概要

#### 3-1 目的

韓国の中級学習者にとってもっとも関心があるものの一つが、学習者本人の会話能力がどのレベルかを知ることである。しかし、現在は基準が曖昧であるため、教師も学習者に本人のレベルについて明瞭に示すことが難しい現状である。スタンダードの必要性について考察するとともに、会話基準についても明らかにし、日本語の会話基準について具体化することで、学習者が会話能力の把握や学習目標の設定することを助け、学習意欲を持たせることを目的とする。

#### 3-2 方法

まず、既存の会話能力基準の現状について把握することが必要である。そこで、現在世界的に広く口答試

験基準として使用されている、ACTFL・CEFRなどの会話基準と日本韓国で行われている口答試験の基準をみる。

#### 4. 会話能力基準の現状

##### 4-1 定義

言語能力が取り上げられていた時代から、コミュニケーション能力、そしてインターアクション能力の必要性へと変わっている。まず、言語能力をChomsky (1965) が、「能力」（話者-聴者の言語の知識）と「パフォーマンス」（具体的状況における実際の言語使用）（*competence* (the speaker-hearer's knowledge of his language) and *performance* (the actual use of language in concrete situations)）とした。また、能力とは、自然科学的研究をするために理想化して構成する概念であり、私たちが日常的に観察しているパフォーマンスとは異なるものとし、自然科学としての言語学の対象であるとしている。これに対して、ハイムズはチョムスキーを批判し「コミュニケーション能力」（communicative competence）について、Hymes (1972) で、「いつ、だれに対して、どのように話すかといった言語使用の適切さに関する能力」としている。また、Canal (1983) はコミュニケーション能力を①文法能力、②社会言語能力、③談話能力、④ストラテジー能力の4つに分けている。Bachman (1990) と Bachman & Palmer (1996) は四種類の言語能力/知識 (language competence / knowledge) と非言語的な事柄に関する知識 (world knowledge / topical knowledge) を設定し、これに加え「方略的能力」という古くからの用語を、従来の意味（コミュニケーション方略）と異なる意味で使っている。また、ネウストプニー (1995) が、コミュニケーション能力を超えるものとして、インターアクション能力<sup>(2)</sup>（コミュニケーション能力+社会文化能力）を案出している。ネウストプニーは、外国人の真の意思疎通と共存が可能になり日本が世界で理解されるようになるために、文法教育一辺倒を脱して、「社会文化」能力を基盤として、「社会言語」能力と「言語」能力を習得しなければならないとする。

このようなことから、会話能力は文法知識や社会言語知識を相手に「話す」という手段を使い状況に応じて適切に使うことができる能力であると考ええる。

##### 4-2 英語会話能力基準

英語に関するレベルの基準としてACTFL、CEFRをみる。CEFRやACTFLは英語のみではなく、日本語を含む数ヶ国語共通の評価基準でもある。しかし、この2つを基準としている英語教育機関やテストが多い

こと、またCEFRは英語の基準をもとにつくられたこと（Threshold Level 1990）などの理由から英語の基準とした。CEFRはレベルが6段階、ACTFL-OPIはレベルが10段階（超級・上級・中級・初級）に分けられている。また、会話能力のレベル基準はそれぞれ内容・場面・トピック・機能などの観点から各レベルで「できること・できないこと」などについて細かく記述している。また、CEFRでは「～ができる」という形で会話をはじめとした言語能力基準をのCan-do-statements作っている。ACTFL-OPI・CEFRの会話能力に関する基準をから分かることは、語彙、文法、流暢さ、正確さなどの観点からの記述は少し見られるが、むしろそれよりは機能・話題・場面から会話能力を測ることに重点を置いているということである。その理由として考えられることは、文法、語彙ができて流暢であっても、会話能力を測ることはできないと考えているのではないかということである。それを測るためにできることは機能・話題・場面という観点から見ることでありという考えが伺える。また、2つの基準が英語だけの基準ではないこともその理由として挙げられる。

#### 4-3 日本語会話能力の基準

##### 4-3-1 日本における会話能力の基準

日本はスタンダードや共通枠組みといわれるものを作ろうという動きはあるが、まだ各テストや教育機関、教材が独自に基準を作っている。現在、日本で実施されている口頭試験にJETROのBJTビジネス日本語能力テスト、ACTFL-OPIがある。また、JLPTは口答試験は実施していないが、Can-do-statementsの「話す」の部分で会話についての基準を記述している。まず、JETROのBJTビジネス日本語能力テストは聴読解試験と口頭試験に分かれており、それぞれ6段階にレベル基準を設けている。聴読解試験で上位2レベルを獲得した受験者のみを対象に口答試験がおこなわれるという特殊な試験であるため、すべての学習者の会話能力を測ることはできない。また、ACTFL-OPIに関しては、英語の基準を日本語の基準としても使用している。JLPTのCan-do-statementsの「話す」に関しては、項目のほとんどが2級合格者以上（中級修了レベルといわれている）を対象とした項目で成り立っている。

##### 4-3-2 韓国における会話能力の基準

韓国でも韓国独自の日本語に関するレベルの基準は日本と同様まだなく、そのため各テストや教育機関、教材が独自に基準を作っている。現在、韓国で実施されている口頭試験にはSJPT（Speaking Japanese

Proficiency test)、ACTFL-OPI などがある。ACTFL-OPI、JLPT の状況は日本と同様である。SJPT は OPI テスターによって判定される口答試験であるため、基準は OPI 基準の影響が強く、その基準はやはり、「機能」「場面」「話題」面に注目し判定される。OPI と違う点はレベル分けの部分であり、SJPT ではレベルを 10 段階 3 レベル（上級・中級・初級）としている。

#### 4-3-3 日本語会話基準と具体化の可能性

韓国・日本の口頭試験の基準をみると、ACTFL-OPI、CEFR の影響を強く受けていることがわかる。今後、韓国や日本で日本語独自の会話能力基準を設けるにあたって、ACTFL-OPI や CEFR のように「機能・話題・場面など」から会話基準を立てることが考えられる。基準が明確になれば「機能・話題・場面など」の具体化のみにとどまらず、それに準ずる「語彙・文法・文型など」の具体化も可能性である。それによって、日本語にふさわしい表現の明示も可能になると考えられる。また、韓国人学習者にあった難易度などの設定も期待ができる。

#### 5. コンソーシアムで得られたこと

会話能力とは何かという部分について定義を明確にすることが重要であるということ。また、多くの会話基準からスタンダードや基準について探るのではなく、現在会話能力基準として広く採用されている ACTFL・CEFR における会話基準の特徴と共通点や相違点について深く調査することが重要であるということが得られた。

#### 6. 今後の方向性

コンソーシアムで得られたことを基に会話基準を ACTFL・CEFR に絞った研究を進め、日本語における会話基準の中級レベルに注目してその位置づけを考察し、具体化していきたい。

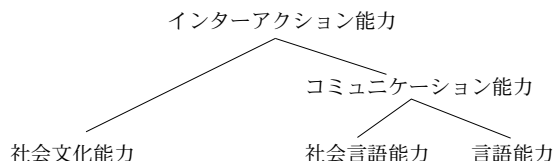
#### 注

(1) 各国の日本語スタンダード

1988年 オーストラリア All Guideline/Australian Language Level Guideline/1990年 アメリカ 21世紀日本語学習スタンダード/2000年カナダ Canadian Language Benchmarks 2000/2001年ヨーロッパ学

習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠/2001年中国 課程標準 中等教育日本語科目/2002年韓国 第7次教育課程

(2) ネウストプニーのモデル。



#### 参考文献・参考サイト

- 李徳奉他 (2006) 『日本語学』 11月号 「特集 日本語教育のスタンダード」 明治書院
- 小川芳男他 (2002) 『日本語教育辞典』 pp633-638大修館書店
- 櫻井直子 (2006) 『日本語教育実践研究フォーラム報告』 「外国語学習のためのヨーロッパ共通参照枠組み：学習、教授、評価(CEF)を参照したカリキュラム・試験評価の再編成と日本語授業への応用—ベルギー・ルーヴァン市現代言語センターの例—」
- 島田めぐみ (2006) 『世界の日本語教育』 Can-do-statements を利用した言語行動記述の試み—日本語能力試験受験者を対象として—
- 柴原智代 (2007) 『日本語教育紀要第3号』 「各国のスタンダード作成の意義と日本の課題—ヨーロッパ、米国、オーストラリア及び中国、韓国の比較・分析—」 国際交流基金
- 谷誠司 (2006) 「日本語テストの分析と新しいテストの開発」 同徳女子大学 大学院 博士学位論文
- 松尾馨他 (2006) 『世界の日本語教育』 pp155-168 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠(CEF)の日本語教育における活用—ドイツ・ベルリンの中等教育ガイドラインの例—」 国際交流基金
- ヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金 (2005) 『日本語教育国別調査 ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』 独立行政法人国際交流基金

ALTE <http://www.alte.org/>

ACTFL <http://www.actfl.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=1>

JETRO <http://www.jetro.go.jp/indexj.html>

SJPT <http://exam.ybmsisa.com/sjpt/index.asp>

あいはいら みち/同徳女子大学大学院 日語日文学科  
imichil3@yahoo.co.jp